

認知症患者があまりのまままで治療を受けられる病棟作り



精神科特集

社会医療法人聖ルチア会 聖ルチア病院

大治 太郎 理事長・院長



社会医療法人聖ルチア会
聖ルチア病院
福岡県久留米市津福本町1012
☎0942-33-1581
https://st-lucia.or.jp/

65歳以上の約1割が発症すると言われる「認知症」。

患者の早期発見やサポートだけでなく、在宅で介護する家族の心身の負担なども問題になっている。2011年に認知症治療病棟を設置した社会医療法人聖ルチア会聖ルチア病院。大治太郎理事長・院長に話を聞いた。

「と判断されて入院していき、それからその問題となっていて行動をコントロールすることが重要で、抑束する、強い安定剤を投与して眠らせる、といったことはしません。認知症には記憶等が欠落していく中核症状と、それともなっていて生じる周辺症状がある。問題行動は主に周辺症状に分類されます。しかし、行為そのものを止める薬はないのです。」

「また、迷惑行為を大幅に減らすこともできます。胃薬や血圧の薬など、普段飲んでいる薬の中には判断力を鈍らせる副作用を持つものがあります。」

「また、迷惑行為を大幅に減らすこともできます。胃薬や血圧の薬など、普段飲んでいる薬の中には判断力を鈍らせる副作用を持つものがあります。」

「のがある。それらを周辺症状に影響する副作用が出てく、薬に置き換えるだけで周辺症状は少なくなることで多々あります。」

「問題行動といっても患者さんの頭の中ではちゃんとした理由があります。夕方になって「家に帰る」と徘徊する方は、昔住んでいた自分の家を探していることがほとんど。子どもの時に住んでいた家に帰りたいんですね。当然、昔の家は見つからないから、不安や怒りを感じてしまう。単に行方を抑えるのではなく、心理的背景を理解して話を聞けば患者さんは落ち着きます。」

「徘徊も病棟内であれば止めます。思う存分歩いてもらって、疲れたところで職員が休憩を促すと、自然と落ち着いていただけます。」

「のびのびとした環境で患者さんとご家族に安心を提供する」。それが当院の認知症治療病棟の役割です。

「作業療法は午前と午後1回ずつ。足のリハビリなどトレーニングに近いものから、歌を奏しむことを目的にしたものまで、豊富なバリエーションがあります。折り紙や編み物などの作業も良いのですが、男性の患者さんはあまり気が乗らないことが多い。イスに座ってボールでボールをたたく一掃サッカーや風船パレーなど、勝敗があるスポーツが人気です。運動を積極的に取り入れ、男女とも楽しめるようバリエーションを揃えています。」

「このタイプの薬は一定の効果も期待できるものですが、患者さんによってはある時期に興味が弱くなってしまうことがあります。」

「この場合は、この抗認知症薬を中止するだけで、興奮性が収まる場合が多くあります。」

「不眠症で昼夜が逆転した患者さんの中には、患者さんの生活リズムを整えるために下筋力が低下しにくい、新しい催眠導入剤を使っています。」

「今後の課題は、新しい介護施設を設置する必要があると感じています。今は退院後の患者さんを「重度認知症ケアアサナ」に案内していますが、それで十分なケアだといえるのか。在宅で看ているご家族の負担をもっと減らせる方法はないのか。それを日々考えています。」

「今後、ますます認知症患者は増えていきます。介護保険と医療保険の両方が適用できる入居施設をつくりたい。まだまだ構想の段階ですが、認知症介護に特化した施設をつくることを目標とします。」



大治太郎 1955年11月15日生まれ 福岡県久留米市出身
1980年九州大学医学部卒業 2003年院長 2012年理事長

「今後の課題は、新しい介護施設を設置する必要があると感じています。今は退院後の患者さんを「重度認知症ケアアサナ」に案内していますが、それで十分なケアだといえるのか。在宅で看ているご家族の負担をもっと減らせる方法はないのか。それを日々考えています。」

「今後、ますます認知症患者は増えていきます。介護保険と医療保険の両方が適用できる入居施設をつくりたい。まだまだ構想の段階ですが、認知症介護に特化した施設をつくることを目標とします。」

◆メディア掲載のご紹介◆

九州医事新報 (2018/7/20 発行) に
大治院長の記事が掲載されました。